

『天台四教儀』における法華三昧の考察

——三昧と懺悔を中心として——

金 貞 男 (徧照)

1 問題の所在

天台智顗 (538 ~ 597) によって定立された天台実践觀の法華三昧¹⁾を高麗の諦觀 (生没年代未詳・961 [度宋]) はどういう風に受け止めているのか。諦觀撰の『天台四教儀』は、天台教学の代表的な綱要書になっているが、そこには同用語が見当らない。しかし両者の思想的基盤を法華一乘思想とみると、それに基づいた三昧觀は、『天台四教儀』にも示されるはずである。

そこで、本稿では『天台四教儀』の撰述意図を注目し、諦觀の実践觀を考えてみたい。智顗の法華三昧をどう表現し、懺悔觀とはどう関わっているのか、ということである。

2 『天台四教儀』の三昧觀

法華三昧は、『法華經』の諸法実相觀を含蓄する用語といえる。それは一乘思想と深い関連性をもつ。では、諦觀は『天台四教儀』において一乘思想についてどう見ているのか。彼は『法華經』「方便品」の一句を挙げて実践論を展開する。すなわち、

来至法華會上。総開會麁前四味麁。令成一乘妙。諸味圓教更不須開。本自圓融不待開也。但是部内兼但對帶。故不及法華淳一無雜。獨得妙名。良有以也。故文云。十方仏土中唯有一乘法。無二亦無三。^教 正直捨方便。但說無上道。^行 但為菩薩。不為小乘。^人 世間相常住。^理 (T46.775b)

という。この中で成一乘妙・諸味圓教・本自圓融・淳一無雜・獨得妙名の思想的構造について諦觀は「故文云」以下の内容を挙げる。諦觀が一乘思想に根拠した一乘觀法と円教の行法を同一視していることがわかる。たとえば、円教を定義して、

次明円教者。圓名圓妙圓満圓足圓頓。故名圓教也。所謂圓伏圓信圓斷圓行圓位圓自在莊

嚴圓建立衆生。諸大乘經論說仏境界。不共三乘位次。総属此教也。(T46.778c)
 という。彼は円頓の教相を五つ挙げているのである。そうした教相を「仏境界」といい、さらに段階的な三乘法と区別している。すなわち諦観は一乗思想と円教思想を根拠として観法を展開しているのである。

このような諦観の実践観は智顗のいう法華三昧観法と相通じるものと考えられる。なぜならば、諦観が、

然依上四教修行時。各有方便正修。謂二十五方便十乘観法。若教教各明。其文稍煩。

義意雖異名数不別。故今總明。可以意知。(T46.780a)

と説くからである。彼は、四教の実践には方便と正修とがあるといい、そこに二十五方便と十乗観法を説いていく。その中の十乗観法について具体的にみてみると、

次明正修十乗観法。亦四教名同義異。今且明圓教。餘教例此。一観不思議境。謂観一念心。具足無減三千性相百界千如。即此之境即空即假即中。更不前後。廣大圓滿横豎自在。故法華經云。其車高廣。(T46.780c)

とある。諦観は法華三昧の円頓止観を、円教の十乗観法の第一、観不思議境として位置付けている。観不思議境とは、法華三昧の円頓止観の実践である、一念三千に基づいた一心三観の実践行を意味する。さらに彼は、観不思議境を『天台四教儀』の化法四教の中、円教の五品弟子位の随喜品に現れている妙法の境界としている。例えば、

初五品位者。一随喜品。經云。若聞是經而不毀訾起随喜心。問随喜何法。答妙法。妙法者。即此心也。妙心體具。如如意珠。心仏及衆生是三無差別。此心即空即假即中。常境無相。常智無縁。無縁而縁。無非三観。無相而相。三諦宛然。初心知此。慶已慶人。故名随喜。(T46.779a)

という。このように妙法の境界を、円融三観と円融三諦とに定義するのである。

従って、諦観の十乗観法の第一、観不思議境とは一心三観の実践であり、円教の五品弟子位の随喜品とは一念三千の教相を示している。こうしてみると、彼は智顗の教即観、観即教の円融無碍の実践行を力説していることがわかる。それゆえ、『天台四教儀』に現われている十乗観法の第一「観不思議境」と「法華三昧」の円頓止観とは深く結びついているといえる。すなわち観不思議境の観法は観ずる対象そのものが不可思議なる三諦円融の状態にいたる。これこそ円頓止観の核心といえよう。いわば、あらゆる対象が三諦円融の実相を現成しているわけである。

3 『天台四教儀』の懺悔観

観不思議境の実相観法は、懺悔観とどのような思想的関連性をもつのか。

諦観は『天台四教儀』で懺悔観について次のように述べる。すなわち、
 内以三観観三諦境。外以五悔勤加精進。助成理解。言五悔者。有二。一理二事。理懺者。
 若欲懺悔者。端坐念実相。衆罪如霜露。慧日能消除。即此義也。……言事懺者。……
 二勸請者。……三隨喜者。……四廻向者。……五発願者。……是為五悔。下法諸位
 直至等覺。総用五悔。更不再出。例此可知。（T46.779a～b）

とある。ここに現れる五悔は、智顗の『法華三昧行法』に説かれている。

また、『摩訶止観』の法華三昧の実踐行法には具体的に五悔という言葉が用いる
 ことはないものの、同内容を説いている。すなわち、

約法華亦明方法勸修。方法者。身開遮。口説默。意止観。身開為十。……

六六根懺悔。……別有一卷名法華三昧。是天台師所著疏傳於世。行者宗之。比則兼於説
 默。不復別論也。（T46.14a）

とある。

そこで、智顗の『法華三昧行法』では初行と久行とを区別する。初心者は段階的
 に修行し、久行者は直ちに坐禅に入って、坐禅の中に懺悔を並行する。これを理
 懺という。法華三昧にも理懺と事懺とがある。しかし智顗は修行の階位によつて
 は理懺に重きをおいている。特に『摩訶止観』「知次位」には法華懺を六時五悔
 の方便として位置づけられている²⁾。

ところが、諦観のいう五悔は智顗の『法華三昧行法』にも「懺悔六根、勸請、
 隨喜、回向、発願」として説かれているが、その具体的観法は一概的に同じ内容
 とは言えない。先述の如く、諦観の五悔は理懺と事懺に分けられるが、円教の五
 品弟子位から等覺に至るまで五悔を行う。従つて五悔の中にも法華懺悔を最上法
 としているのが理解できる。

では、この智顗と諦観の懺悔法の相異点は何か。『法華三昧行法』では「懺悔
 六根、勸請、隨喜、回向、発願」の一つ一つ行うのを一乗懺悔と見ている。

それに対して、諦観の五悔懺悔法は、円教の五品弟子位だけに限るものではな
 く、等覺まで五悔を並行することである。つまるところに言えば、諦観の懺悔観
 は、智顗の法華三昧の一乗懺悔法に立っている。

4 むすび

以上、諦観の『天台四教儀』にみられる十乗観法の観不思議境と五悔について考察してきた。

『天台四教儀』における法華三昧観と懺悔観をみると、智顗が三昧の実践を最も重視すると同時に、懺悔行法もまた修行の根本としていることがわかる。智顗は懺悔と三昧を同一視している。懺悔即三昧、三昧即懺悔の思想的論理構造を持っているといえる。言い換えれば、三昧行を行ずることがそのまま懺悔であり、懺悔を行ずることが三昧行に入ることである。

このように見てくると、諦観の『天台四教儀』の三昧と懺悔の実践行は、智顗の思想を受け入れながらも、また新たな体系を形成しているといえる。

-
- 1) 智顗の法華三昧は、『摩訶止観』巻二 (T46. 12a) の四種三昧の中、一つとして説かれている。塩入良道・池田魯参「金沢文庫の天台典籍」(『金沢文庫研究』第23巻5号「通巻247号」, 1977) では、金沢文庫本『法華三昧行法』がその別行本と見做すが、本稿もその説に従う。
 - 2) 『摩訶止観』「知次位」では法華三昧の「懺悔六根、勸請、隨喜、回向、發願」を円教の修行方便の五悔として位置付けている。すなわち、「若円教次位者、於菩薩境中広分別、但彼証今修故須略辨、若四種三昧修習方便、通如上説、唯法華別約六時五悔重作方便、今就五悔明其位相、先知逆順十心繫縁実相、是第一懺、常懺悔無不懺悔、但心理微密観用輕疎、黒惡覆障卒難開曉、重重身口助發意業、使疾相応更加五悔耳。」(T46. 98a) とあるのがそれである。

〈キーワード〉 法華一乗、円頓止観、十乗観法、五悔、円教、『天台四教儀』

(佛教大学研究員)

cuss the “*zhaihui*” service and the “*jiangjing*” assembly, piece together and reconstruct the development of the “*zhaijiang*” usage throughout Chinese Buddhist history.

90. The true meaning of six “Non-enlightenments” in the *Shi-moheyan lun*

Daishin SHIMAMURA

91. On “self ordination” in the *Fanwang jing*

Kyung-mi IM

One characteristic of Mahāyāna bodhisattva precepts is the idea of “self-ordination”. In the case where one has no teacher, self ordination means vowing to keep the Buddhist precepts personally. Although in self ordination the spiritual aspect is stressed, there also need to be certain conditions for it to take place. This characteristic is explained in the idea of “visionary experience”, found in the 23rd precept of the *Fanwang jing*. This essay examines the influence of selfordination as found in the *Fanwang jing*, taking into account the *Huayan jing* and the point of view of practice.

Visionary experience is built up through practice. In this way, the visionary experience is based on practice, and the person who completes “self ordination” follows the influence of the *Huayan jing* in the *Fanwang jing*, hence bodhisattva non-regression is necessary for visionary experience. The disciple of the Buddha is penitent, practices and sees the visionary experience as proof of ordination. Accordingly, the visionary experience found in “self ordination” of the *Fanwang jing* should be understood from the point of view of practice.

92. Research on the Meditation on the Lotus Sūtra (法華三昧) in the *Tiantai sijiao yi* (天台四教儀)

Chong-nam KIM

In the present paper, I examine the Meditation on the Lotus Sūtra 法華三昧, ascribed to Zhiyi 智顗 (538-597), in the *Tiantai sijiao yi* 天台四教儀 (*Tiantai Fourfold Teachings*) written by Ch'egwan 諦觀 in Korea.

The Meditation on the Lotus Sūtra is considered the Complete and Sudden Practice 円頓止觀 by Ch'egwan. It is Viewing Inconceivable Reality 觀不思議境 which is the First stage of the Ten Modes of Contemplation 十乘觀法 of the Complete Doctrine 円教.

Concerning the Viewing Repentances 懺悔觀, Ch'egwan advocated the practices of the Five Dimensions of Repentance 五悔 in the Grade of Joy from According With the Truth, the First Stage of Five Preliminary Grades of Disciples.

He placed the Repentance for Six Sense Organs 懺悔六根, Imploring 勸請, Rejoicing 隨喜, Merit-transference 廻向 and Making vows 發願, which were initiated by Zhiyi, in the Auxiliary Practices 助道行 of the Complete Doctrine.

He also advocated the Five Dimensions of Repentance from the Stage of the Five Preliminary Grades of Disciples to the Stage of Preliminary Enlightenment 等覺位. After all, he stood on the side of Method of Repentance of the One Vehicle 一乘懺悔法 of the Meditation on the Lotus Sūtra.

93. The Buddha-Contemplation Sōn (念佛禪) of the Master Naong Hyoegun (懶翁惠勤) in the Koryō (高麗) Period

Bo-kwang HAN

The lifetime of Master Naong Hyoegun (1320-1376) was a time of difficulty under the influence of the Yuan (元) Dynasty in China. Effort were made to repair the damage suffered by society and the Buddhist monastic community at the end of Koryō Dynasty. Neo-Confucianists strongly criticized Buddhism.

While broadly spreading Master Dhyānabhadra's (指空) No-mind Sōn (無心禪) and Master P'yōgsan Ch'ōrim's (平山處林) Linji Sōn, Master Naong had much interest in Pure Land Contemplation Sōn (淨土念佛禪) and taught